

浦島説話と柳毅伝

両作品の文学表現と神仙道教思想の受容

THE TAIL OF *URASHIMA* AND *LIU-YI-CHUAN*

Tha Literary Expression of Both Works

and the Reception of God-like Reclouse Daoist Thought

項 青*

It is said that the question as to whether The Tale of Urashima is Chinese or Japanese arose from its similarity to the Tale of *Yamasachi-Umisachi* found in *The Kojiki*. Indeed they share a great many elements. However, the greatest basic difference between them is found in the theme of a time-slip in another world. Since no gap between the passage of time in the other world and the world of humans is visible in the Tale of *Yamasachi-Umisachi* found in *The Kojiki* we can perhaps conclude that this element is Chinese.

By comparing The Tale Of Urashima with the Tang dynasty romance, *Liu-yi-chuan*, which it most closely resembles, I have pointed out all of the elements which they have in common in literary expression and god-like recluse Daoist thought and have also taken a look at all of the differences between the two. The

* XIANG Qing 中華人民共和国、広西大学外国語学部日本語学科を卒業。熊本大学大学院文学研究科国文学専攻の修士課程を終え、現在神戸大学大学院博士課程に在学中。「日本古代文学における異境」が、主要な研究テーマ。論文に「道教・陰陽五行思想から見た古代浦島説話－星辰と不死をめぐって」（熊本大学『国語国文学研究』29号）がある。

Liu-yi-chuan, which was completed in China during the mid-Tang, is both a story of an extended stay in an enchanted garden and a tale of a water-god's home. However, The Tale of *Urashima*, while having the two above elements, is very different from the mid-Tang *Liu-yi-chuan* in that it also has a drifting-ashore motif like that of The Tale of *Yamasachi-Umisachi* in *The Kojiki* with the drifting-ashore motif. In addition, in the *Liu-yi-chuan* expressions concerning the recluse's elixir and immortality are very prominent while in contrast The Tale of *Urashima* has little to say about the recluse's elixir and brings up only the god-like recluse idea of immortality. I believe that this indicates that there is something of a difference between the understanding and reception of god-like recluse Daoism in the two countries.

Also, the Chinese conception of time often seen in a story of an extended stay in an enchanted garden as in the expression, "A day in Heaven is like unto a year on earth," is found in The Tale of *Urashima* as "three years is like unto three hundred years," or in expressions like "seventh-generation grandchildren," while in *Liu-yi-chuan* on the contrary such a view of time is not much touched upon. I have investigated the disparity in the use of such expressions.

My conclusion is that ancient Japanese adapted the culture which they imported to their concerns, gradually absorbed it by means of their own peculiar method of digestion, and without being conscious of doing so transformed it into a literature written in classical Chinese peculiar to Japan, so that it went through a process of changing into culture or thought which has a thoroughly Japanese flavor.

私が初めて日本の浦島説話と『柳毅伝』との関係に興味を持ったのは、お伽草子の『浦島太郎』を読んだ時である。読んですぐに、これは『柳毅伝』と何か関係があるな、と感じていた。本発表ではお伽草子ではなく、『釈日本紀』所引の『丹後国風土記逸文』に見られる浦島説話との比較を行なうものである。その前に『柳毅伝』について、簡単にご説明をしておきたいと思う。

『柳毅伝』は中唐の李朝威の書いた伝奇小説で、今日でも京劇で演じられたり、子供向けの本が何冊も出されるなど、中国人にとっては大変馴染み深い作品である。『太平広記』巻419龍の2に収められている。冒頭に「唐の儀鳳中」とあるが、「儀鳳」は初唐の年号で、西暦でいうと、676年～679年である。また末尾に、「異聞集に出づ」という注があるけれども、この書物自体は現存していない。唐末の伝奇小説『蕭曠』に、「柳毅靈姻之事」という表現があることから、晩唐には、すでに広く中国国内に流布していた^①と考えられている。後世の文学作品への影響は大きく、これをふまえた明代の『橘浦記』は、日本にも伝わっている^②。しかし、もとの『柳毅伝』が、すでに奈良時代に日本に伝わっていた形跡は、今のところない。

一方浦島説話は、皆様よくご存知の話で、『丹後国風土記逸文』のほか、『日本書紀』『万葉集』、『群書類従』本所収の「浦嶋子伝」及び「続浦嶋子伝記」、『古事談』、『扶桑略記』、『本朝神仙伝』及び『お伽草子』などに見えている。成立の時代が下がるにつれて、主人公浦嶋子が浦島太郎に、蓬莱山が龍宮城に、淹留（＝異境に留まっている）時間が三百年から七世孫に、など、部分的な変化が見られるが、それ以外に、神仙道教思想の受容の度合いが、後に成立するものほど強くなっている、という変化も見られるのである。後期の浦島説話の出典については、既に渡辺秀夫氏が詳しく論じているが^③、前期については、解明すべき点がまだ多く残っていると思う。本発表では、ごく初期の『丹後国風土記逸文』の古代浦島説話を取り上げ、『柳毅伝』との比較を通じて、その大陸文化や中国思想の受容について若干、考察を加えたいと思う。なお、以下単に『風土記』と呼ぶ。

また、『柳毅伝』と浦島説話との関わりについて、初めて紹介されたのは、君島久子氏の「洞庭湖の龍女説話——浦島説話に関する新資料——」というご論文である^④。そこでは、作品の具体的な表現や性格についてはほとんど触られていない。ここでは、両作品を筋にそって比較対照したい。（資料1の表をご覧ください。）三つ目の「仙境に行く理由」で、『柳毅伝』の方に（異類婚）としてあるのは、この時点では、柳毅は龍女の手紙を伝える為に、洞庭湖の中の水府、即ち仙境に行くのであって、龍女と結婚するのは、彼が龍宮から帰ってきた後のことだからである。そういった違いもあるが、ご覧のとおり、対応する表現があり、基本的な筋においては、両作品はかなりよく似ているといえるのではないであろうか。

しかし、このような類似が見られる両作品も、比較の基準を変えると、下にあげた資料2のように、違いが目立ってくる。この表は、小川環樹氏による仙境淹留譚の八要素^⑤に基づいて、それを満たす場合に○印をつけたものである。では（A）とした「仙薬及びそれによる長寿」以下について、説明を加えていきたいと思う。（A）については後ほど詳しく述べるが、ここでは括弧の中に記したように、他の浦島説話には仙薬についての記述が見られることを指摘しておくに留める。次の「贈物とそれに関する禁忌（タブー）」については、『柳毅伝』には見られていない。但し六朝の怪異小説や唐の変文には、そういった要素がある^⑥。その次の「帰郷」というのは、望郷の念によって帰郷するか否かである。『柳毅伝』においては、先程も述べたとおり、龍宮に行く目的が龍女の為に手紙を伝えるだけなので、愛情にまさるホームシックによって帰郷するのではない。その次の要素については、浦嶋子は禁忌を犯した為に、二度と仙境に戻ることができなかった。逆に、『柳毅伝』では龍女と結婚し、彼女の父親の洞庭君から、水中世界と自由に往来できる「開水犀」（犀の角）という宝物をもらった為に、仙境に戻ることが可能であった。最後の（B）と書いた「時間のずれ」については、『柳毅伝』には全く見当たらない。これも古代中国の神仙譚や六朝怪異小説に見られる要素の一つである。

以上、両作品の相違点をいくつか指摘したが、このあと（Ａ）と（Ｂ）について、更に詳しく取り上げ、『風土記』の浦島説話成立の背景に迫りたいと思う。まず（Ａ）から見ていきたい。（資料３をご覧ください。）これは資料２の（Ａ）に当たる表現を具体的にあげたものである。（資料２と合わせてご覧ください。）『柳毅伝』に見られるような、仙人食や薬を服用すると不老不死が叶うという考え方は、古代中国人の神仙思想や道教に見られるものである。具体的に何を食べたかについては、レジメの下資料４の（Ⅰ）、（ト）の『列仙伝』をご覧ください。「松の実・黄散・赤丸・朮・菖蒲の根」などがあげられている。『柳毅伝』では（資料３にお戻り下さい）、〈仙薬〉の欄に、「一丸飲めば一年寿命を延ばすことができる」とか、〈長寿〉の欄に、「容貌が衰えず」、「益々若返るようであった」というように書かれている。

ところが、『風土記』の「浦嶋子伝」の方には、仙薬の服用が見えず、長寿の予告としては、「天地と畢へ、日月と極まらむとおもふ」と仙女が言っただけであった。そして『風土記』では、いきなり「今、三百余歳を経つといへり」という表現が出てくるのである。しかし、『風土記』よりも後に成立した『群書類従』本所収の「浦嶋子伝」や「続浦嶋子伝記」、及び『古事談』所収の「浦嶋子伝」などには、浦島が仙境で、仙人食や長寿の薬を飲んだということが詳述されており、更に「続浦嶋子伝記」には、「上古の仙人なり。齡三百歳に過ぎたりといへども、形容は童子のごとし。」と、彼が仙人であることが明記されている。この（Ａ）の部分については、まず、『柳毅伝』と浦島説話との違いということから注目したものである。つまり、浦島説話群の中での『風土記』の特異性でもあったわけである。

では、なぜ仙薬のことが記されていなかったのであろうか？それに対する私見を述べる前に、『風土記』の成立年次について、簡単に述べておきたいと思う。丹後国が丹波国から独立して、一つの国になったのは、『続日本紀』によると、和銅６年（西暦713年）４月３日のことである。同じ年の５月２日に、元明天皇の詔によって、諸国に対し、地誌を提出するよう命令が下った。その

提出時期は、国ごとに異なるようであるが、丹後国の場合は、重松明久氏らによって、西暦714～716年頃と推定されている^⑦。

さて、『風土記』の「浦嶋子伝」に、仙薬についての記述が見られない理由であるが、結論から言うと、私は、日本の歴史的な背景によるのではないかと考えている。と言うのは、西暦702年成立の『大宝律令』において、すでに道術禁止令が見られるのである。そして、それが八世紀初頭において、確実に受け継がれていく。例えば、718年成立の『養老僧尼令』にも「小道、符術」に関する禁止令が含まれているし、更に、729年には有名な長屋王の変がある。彼は「左道」即ちよこしまな道を学んでいた。そして、同じ年に、聖武天皇のこの事件に対する勅令には、次のような禁止令が含まれているのである。

「有学習異端蓄積幻術、壓魅呪咀害傷百物者、首斬従流。（中略）封書印符、合藥造毒、万方作恠、違犯勅禁者、罪亦如此。」

即ち道術を学び、呪いなどをした場合は、主謀者は死刑で、連座した者は流罪で、仙薬の調合などの場合も同罪だという、厳しい内容のものである。更に、735年に唐から帰朝した吉備真備の著作『私教類聚』においても、第3「仙道を用ゐざるの事」で仙人崇拜を否定し、第31「詐巫を用ゐざるなきの事」で巫覡の害を指摘している。以上のようなことから、八世紀初頭の日本においては、仙薬を含む道術を排斥する空気が強かったことがうかがえるであろう。そして、このことがほぼ同時期に成立した『風土記』の「浦嶋子伝」に影響を及ぼしていると考えられるのである。仙薬の知識については既にありながら、当時の日本の事情を考慮して記さなかったのではないかと思う。つまりこの（A）の「仙薬と長寿」という仙境淹留譚の一要素から見た場合、『風土記』の「浦嶋子伝」は「日本的」であり、日本の説話の独自性が見られるといえよう。

さて、続いて『柳毅伝』と浦島説話との間に、違いが見られるもう一つの要素、（B）の「時間のずれ」という観点から、『風土記』の「浦嶋子伝」の思想的背景について論じたい。（ご面倒であるが、1枚目の資料2の（B）の部分と2枚目の資料4とを合わせてご覧下さい。）先程も述べたように、『柳毅伝』

には、浦島説話に不可欠の超自然的な時間の差が見られない。しかし、これは六朝の怪異小説や、それ以前の神仙譚にもよく見られるモチーフである。浦島説話研究で有名な出石誠彦氏は、浦島説話に影響を与えた中国説話の具体例をあげられると共に、沖縄・朝鮮・台湾・インドネシアといった東アジアの他の島々においても、類例が伝承されていることを指摘されている^⑧、但し、それらの地域においては文献資料が見当たらないので、私は、まず文字によって確認できる中国の資料にその類例を求めたところ、従来指摘されていなかったものも含めて多くの例が見つかった。その一部が資料4の(Ⅰ)である。なお波線を施し a) b) c) や (ト) と記してあるものは、1枚目の資料2の浦島説話の波線と対応している。

さて、(Ⅰ)の中で(イ)の『異苑』という書物は、比較的古いもので、五世紀の六朝の宋代、劉敬叔の著作である。この本自体が、日本に伝来したか否かは不明である。しかし、これを引いた『藝文類聚』は、奈良朝から平安朝初期の日本の文人たちが好んで利用した唐代の類書である。(ロ)の有名な「王質爛柯」によく似ている。それにしても、(イ)については今までほとんど指摘されてこなかった。なお、(イ)(ロ)共に仙境に入ったとは明記されていないが、そこにいた翁や童子らが、長寿や若さを表わしており、彼らは不老不死の仙人だといえよう。そして、仙境に迷い込んだ人間が、そこでわずかな時間を過ごしている間に、彼らの馬の鞭や鞍や斧の柄は腐ってしまっており、故郷に戻っても知る人は誰一人としていなかったのである。

但し、以上の二話には、望郷の念を生じた為に帰郷するというモチーフはない。望郷については、資料の(ハ)(二)をご覧ください。(ハ)には「遂に留まること半年、故土を懐かしく思ひ、帰らむことを願い求む」とあり、(二)にも「恋慕をいだと雖ども、また其の子息を思ひ、洞穴に返らむとす、しかし旧郷に至る。」という表現が見られる。正に故郷に帰り、両親に会いたいと願う浦嶋子の姿と重なるのである。更に(ハ)(二)の二話は、帰郷後の描写においても浦島説話と類似している。

特に波線b)の「七世孫」や「九世孫」に出会ったという表現は、その下にあげた(Ⅱ)の(イ)の浦島説話群や、更に(ハ)(ニ)にもほぼ同じ表現が見られることが注目されるけれども、ここではこれ以上立ち入らないで置く。

また、(ニ)の王質の話は、勿論中国でも色々な形で受容されていったわけである。特に、唐の詩人、孟郊の「爛柯石」という詩^⑨において、時間のずれが、「仙界一日内、人間千載窮」という〈一日〉対〈千載〉のような対応表現を、ここでは指摘しておきたいのである。

同じ数字ということでは、本発表では、『風土記』の「浦嶋子伝」に見られる「三歳」或いは「三百余歳」に注目しておく。この「三歳」については、目加田さくを氏が、『穆天子伝』の一節を導き出す契機となっているのではないかと指摘されている^⑩。次のような箇所である。「予帰東土、和治諸夏、万民平均、吾願見汝、比及三年、将復而野。」という一節である。つまり、穆天子が西王母と別れる際、三年後には戻って来ると約束する場面である。しかし、私はこれと「浦嶋子伝」とを直結させて考えるのはいかがかと思う。と言うのは、「三」の数字は、中国の神仙道教思想においても、よく利用される数字であり、特に、易・陰陽などと深い関係があるからである。

ところで、道教においては「秘伝」という形式が非常に重要視されている。(2枚目下右の(ホ)の『抱朴子』をご覧ください。)秘伝を伝えるべきではない人に伝えてしまった場合の罰として、寿命が縮められるということが見えている。ほぼ同じことが(ヘ)にもある。罪が大きければ、「紀」即ち三百日、小さければ、「算」即ち三日、寿命が縮められるわけである。「三」という数字が見られるだけでなく、「三百日」と「三日」という百対一の対応が見られることにも注意すべきであろう。但し、これは寧ろ長寿とは逆の例であった。長寿そのものとの結びつきは、次の(ト)の『列仙伝』に求めることができる。仙薬については先にふれたが、それを服用することによって得られる寿命は「三百歳」、「三百余年」であった。

以上見てきたような、『列仙伝』などの「三百歳」という長寿の概念と、先

に見た（イ）から（ニ）の六朝怪異小説における仙境と人間界との時間のずれという概念とを、『風土記』の「浦嶋子伝」は取り込んでいたわけである。この時間の捉え方は、神仙道教思想を代表する考え方の一つであり、仙境淹留譚の表現手法の一つとしても重要である。「天上一日、人間一年」という諺は、現代中国にもある。一方の空間的広がり、即ち日本への伝播という点をもう少し補っておくと、再び資料4の（ニ）の『拾遺記』をご覧ください。ここにも「今、三百年を経つといへり」とあるが、この書物も、またその出典である『統齊諧記』も『日本国見在書目録』に見え、日本への伝来が確認できる。また下の段、日本の例の（ロ）の傍線部をご覧ください。時間のずれという概念は、「浦嶋子伝」に限らず、『日本霊異記』にも投影されているのである。

このように、資料2の表の（B）の「時間のずれ」という仙境淹留譚の一要素は、『柳毅伝』には見られなかった。けれども、『風土記』の「浦嶋子伝」の中国の神仙道教思想の強い影響を受けていることが、改めて確認できたことと思う。なお、『柳毅伝』にそれが見られない理由について、仙境との往来という設定もあるであろう。私は、その神仙よりも人間を重視するという現実性の強さが原因ではないか、と考えている。ところで、『古事記』の「海幸・山幸」は、浦島説話の原型であるとか、逆に浦島説話から「海幸・山幸」が派生したものであるとかいわれているが、それにもかかわらず、『古事記』にも同様に時間のずれは見られない。この場合の違いは、大陸文化の受容のしかたの違いによるのだと思う。つまり、現在浦島説話は、日本古来の伝承であるとの説がほぼ定説化しており、確かに漂着譚の要素などは当然のことながら中国に類話が見られないのであるが。しかし、少なくとも時間のずれという点においては、大陸の文学作品の影響が濃厚だといえるであろう。もちろん「海幸・山幸」が、大陸文化の影響を受けていないというわけではない。例えば、『柳毅伝』との間にも、浦島説話以上に同じ水神説話として関連性があるのではないかと思っている。

本発表では、『柳毅伝』についてはあまり詳しくふれられなかったが、その

相違点のうち、(A)の「仙薬と長寿」及び(B)の「時間のずれ」に注目することで、『丹後国風土記逸文』に収められた「浦嶋子伝」の成立の背景を多少なりとも明らかにすることができたのではないかと思う。大陸文化、特に神道教思想の受容において、『風土記』の「浦嶋子伝」は、異なる二つの方向を示していたといえる。つまり、仙薬については排斥し、時間のずれについては、積極的に取り込むという姿勢が見られたわけである。

先程資料4の最初の『藝文類聚』所収の『異苑』が注目されてこなかったことを指摘したが、特に六朝の作品については、他にも言及されていない作品がたくさんある。浦島説話にもっとよく類似する話が出てくる可能性も無いとはいえない。私は、浦島説話に限らず、日中の古代文学における思想的交流に興味を持っている。民俗学的方法もあるが、私の場合は、文献を通して、その交流の実態を明らかにしたいのである。本発表はその第一歩であり、至らない点が多々あったかと思うが、皆様のご批判・ご指導をいただけるなら、幸いに存じます。

注

- ① 褚斌潔「『柳毅伝』の思想和芸術」(中国古典文学鑑賞叢刊『唐伝奇鑑賞集』人民出版社1983年)には、『太平広記』巻311神の21に収めている「蕭曠」に、「近日有人世或傳柳毅靈姻之事」という表現があるから、その表現によって分かると指摘している。
- ② 近藤春雄『唐代小説の研究』「竜宮譚の世界」(昭和53年 笠間叢書)によると、『橘浦記』という作品は、宮内省圖書寮蔵本が発見され、有名になったそうである。この作品の最後には、柳毅が漁夫の捕らえた白亀を買い求めて放生し、後日その亀に乗って、龍宮に至るという報恩譚の趣向は、浦島説話に共通しているところが、大変趣深いものと思う。
- ③ 渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』(勉誠社 平成3年)に収めている「群書類従本『浦嶋子伝』の検討」、及び「『続浦嶋子伝記』の論」と「初期物語成立史の断章——『続浦嶋子伝記』の意味するもの——」などによる。
- ④ 『中国大陸古文化研究』第六号(昭和47年)に掲載している。
- ⑤ 小川環樹『中国小説史の研究』の「魏晋時代以後——仙境に遊んだ説話——」における仙境淹留譚の八要素によって、まとめたものである。(昭和43年 岩波書店)
- ⑥ 『搜神後記』巻一の「袁相、根碩」の話。『晋書』「郭璞伝」、唐の「董永変文」と「田昆仑変文」などの例がある。
- ⑦ 重松明久『古典文庫 浦嶋子伝』の解説によるものである。(現代思潮社 昭和56年)
- ⑧ 出石誠彦『支那神話傳説の研究——浦島説話とその類例について——』(昭和18年 中央公論社)
- ⑨ 孟郊は中唐の詩人であり、作品が平安時代にも伝来している。『全唐詩』巻38に収められた「爛

柯石」の詩が、本発表の時点では、日本への伝来の可能性について、まだ確認していない。

- ⑩ 目加田さくを「伊予部馬養作<水江浦島子伝>〈仮称〉考」（「言語と文芸」2～6 昭和35年）

討議要旨

吉田三陸氏から、両者の舞台についてなどの質問があり、発表者は「日本の場合は漂着譚が入っているが、中国の仙境説話にはほとんど漂着のことが見えない。この点からも浦島説話は、やはり日本的なものではないかと思う。」と答えられた。また小西甚一氏より、こういう種類の伝承を比較する場合は、すでに出来上がっている話しと話しを、文献を単位として比較するのではなく、モチーフにわけて考えた方が良い、という助言がなされた。

〈資料1〉両作品の類似点

筋	「浦嶋子伝」(『丹後国風土記逸文』)	『柳毅伝』
出身地	簡川村(水江の浦＝海岸)	湘濱(湘水という川のほとり)
会合う場所	海中(為釣)→亀姫	道中→洞庭龍君小女
仙境へ行く理由	異類婚	龍宮 →(異類婚) 伝書
仙境へ行く手段	・君宜廻棹赴蓬山。 ・ <u>女郎教令眠目、即不意之間。至海中博 大之嶋。</u> (蓬山)	・叩樹三發、当有応者。 ・武夫揭水指路… <u>謂毅曰：「当閉目数息、 可達矣。」</u>
仙境の様子	其地如敷玉、闕臺晡映。樓堂玲瓏。 目所不見、耳所不聞。	人間珠寶、畢尽于此。柱以白璧、砌以 青玉、床以珊瑚、帘以水精、雕琉璃于翠 楣。飾琥珀于虹棟。奇秀深杳、不可殫言。
仙境で登場する人物と催し	・七豎子昂星と八豎子畢星(迎え者) ・ <u>女郎父母共相迎。</u> ・兄弟姊妹等举杯献酬、隣里幼女等紅顏 戲接。仙歌寥亮、神舞逶迤、其為歆宴 萬倍人間。	・武夫(迎え者) ・ <u>拝龍女之老父(洞庭君)、会洞庭君之 愛弟(錢塘君)。</u> ・会友戚、張廣樂。具以醪醴、羅以甘潔。 … <u>舞万夫于其右…舞千女于其左。</u> ・ <u>洞庭君夫人別宴毅。男女僕妾等、悉出 預会。</u> ・洞庭君出席而歌曰…。
仙境での話題	于斯称説人間仙都之別、談議人神偶会之 嘉。	(武夫)曰：「吾君、龍也。龍以水為神、 举一滴可包陵谷。道士、乃人也。人以 火為神聖、發一灯可燎阿房。然而 <u>靈用 不同、玄化各異。</u> 」 (※錢塘君が柳毅に龍女との結婚を勧める)
別離の場面	・奉拜二親。 ・ <u>女郎拭淚、嘆曰：……即相携徘徊、相 談慟哀。</u> ・ <u>於是女郎親族、但悲別送之。</u>	・明日、毅辞婦。洞庭君夫人泣謂毅… ・使前涇陽女(龍女)当席拜毅、以致謝。 ・(毅)殊有嘆恨之色 ・宴罷、辞別。 <u>滿宮凄然。</u>

(注) *第3頁の(5)*参照

〈資料 2〉 両作品の相異点

仙境淹留譚 の八要素	浦 島 説 話 (『丹後国風土記逸文』)	『柳 毅 伝』
仙 境 (山中 水中 海上)	○ ・蓬山(トコヨノクニ) ・海中博大之嶋 (山・海)	○ ・水府(洞庭湖の龍王の宮殿) ・(洞庭)碧山出于遠波 (水・山)
洞穴(入口)	○ (太宅之門)	○ (宮門)
異 類 婚	○ (亀比壳)	○ (洞庭湖の龍女)
仙薬及び長 寿(不老不 死)(A)	△ ・仙薬は無 (しかし他の浦島説話 には見られる) ・「共天地畢、俱日月極」 ・「今經三百餘歳」。 ・芳蘭之體率于風雲、翩飛蒼天。	・(胡蝦に)「此薬一丸、可増一歳。」 毅因出薬五十丸遺蝦。 ○ ・「夫龍寿万歳、今与君同之」。 「(毅)容貌不衰」。「容顔益少」。
贈物(禁忌)	○ 玉匣	・碧玉箱。開水犀 × ・紅珀盤。照夜璣 ・綃綵珠璧。
帰 郷	○	△
再び仙境に 戻れるか	×	○
時間のずれ (B)	・三歳→三百餘歳 (ト) ・瞻眺 村邑、人物遷易。 (a) ・郷人答曰：「君何處人、問旧遠人 (b) 乎。吾聞、古老等郷人答曰：先世 (c) 有水江浦嶋子獨遊蒼海、復 不還来。」	×

〈資料三〉(A) 仙薬及び長寿の異同

(A)	【丹後国風土記逸文】		【柳 毅 伝】
	仙 薬	無	<ul style="list-style-type: none"> ・「吾不知国客乃復為神仙之餌。」乃相与觀洞庭。 ・後居南海、僅四十年、其邸第與馬珍鮮服玩、雖侯伯之室・無以加也。……以其春秋積序、容状不衰。 ・蝦笑曰：「兄為神仙、弟為枯骨、命也。」毅因出藥五十九遺蝦、曰：「此藥一丸、可增一歲耳。歲滿復来、無久居人世、以自苦也。」…殆四紀、蝦亦不知所在。
	長 寿	<ul style="list-style-type: none"> ・天上仙家之人。……共天地畢、俱日月極。 ・三歳→三百餘歳 	<ul style="list-style-type: none"> ・夫龍寿万歳、今與君同之。 ・以其春秋積序、容状不衰、南海之人、靡不驚異。 ・毅詞理益玄、容顏益少。 ・（毅）凡十餘歳、莫知其迹。自是以後、遂絶影響。

〈資料4〉(B) 「天上一日、人間一年」の時間観念について

(I) 中国の用例

(イ) 『藝文類聚』卷七十四、「巧藝部・枹蒲」

異苑曰。昔有人乘馬山行。遙望岫裏有二老翁。相封枹蒲。遂下馬。以策拄地而觀之。自謂俄頃。視其馬鞭。漉然已爛。顧瞻其馬。鞍骸枯朽。既還至家。無復親屬。一慟而絶。

(ロ) 梁（六世紀前半）任昉著『述異記』卷上、「王質爛柯」

晉王質至信安郡石室山伐木。見童子数人棋而歌。質因駐足觀聽。童子以一物與質。如棗核。質含之。不覺饑。俄頃。童子謂曰「何不去？」質起。視斧柯尽爛。既帰。無復時人。

(ハ) 『藝文類聚』卷七、「山部上・天台山」

幽明録曰。漢帝永平五年。剡縣劉晨阮肇。共入天台山。度山出一大溪。溪邊有二女子。姿質妙絶。遂留半年。懷土思求歸。既出。親旧零落。邑屋改異。無復相識。訊問得七世孫。（参考『幽明録』本文結末、「伝聞上世入山、迷不得歸。」）

(ニ) 『拾遺記』卷十、「洞庭山」

続齊諧記伝。其山又有靈洞。…採藥石之人入中。如行十里…乃見衆女。霓裳冰顏。艷質与世

人殊別。…雖懷慕恋。且思其子息。却還洞穴…而達旧郷。已見邑里人戸。各非故郷隣。唯尋得九世孫。問之云。遠祖入洞庭山採藥不還。今經三百年也。其人說於隣里。亦失所之。

(ホ) 【抱朴子】「内篇・微旨」(四世紀初)

「敢問欲修長生之道、何所禁忌」。抱朴子曰：「禁忌之至急、在不傷不損而已。…天地有司過之神、隨人所犯輕重、以奪其算。算減則人貧耗疾病、屢逢憂患、算盡則人死。」…(三尸)是以每到庚申之日、輒上天白司命、道人所為過失。又月晦之夜、竈神亦上天白人罪狀。大者奪紀。紀者、三百日也。小者奪算。算者、三日也。

(ヘ) 他に、唐・孫思邈『学仙雜忌』

「若泄一言一事者、輒減一算。一算者三日也。」(算=算)

(ト) 【列仙伝】「(三百歳・三百餘年)の用例

(巻上) 「偃佺」 偃佺、采藥父也。好食松実…以松子遺堯、堯不暇服。時受服者、皆三百歳。

「崔文子」 (崔) 文子世好黄老事、居潜(太)山下。後作黄散、赤丸、成石父祠。壳藥都市、自言三百歳。

「涓子」 涓子者、齊人也。好餌朮、接食其精。至三百年、乃見於齊、著天人經四十八篇。

(巻下) 「子主」 甯先生、願我作客三百年、不得作直。…先生曰：「此主吾比舍九世孫、且念汝家。…」

「商丘子胥」(子胥) 年七十、不娶婦而不老。邑人多奇之、從受道、問其要。言「但食朮、菖蒲根飲水、不飢不老如此。」伝世見之、三百余年。

(参考) …【括地志】 負丘之山、上有赤泉、飲之不老。神宮有英泉、飲之、眠三百歳乃覺、不知死。」

(Ⅱ) 日本の文学作品における用例

(イ) 浦島説話の諸本文

「浦嶋子伝」(『群書類従』所収) — 七世孫

「続浦嶋子伝記」(『群書類従』所収) — 経幾數百歳、玄孫之末世。

「古事談」第一、「浦嶋子伝」 — 経三百年後還故郷、其容顔如幼童。

(ロ) 【日本靈異記】

巻上、第五話 今惟推之、逕之八日、逢銛鋒者、当宗我入鹿之乱也。八日者八年也。

巻下、第三十五話 「世間衆生、至地獄受苦、経廿餘年、免耶不也。」僧頭答曰：「受苦之始也、何以知爾。以人間百年、為地獄一日一夜故、未免也。」

(ハ) 菅原道真「劉阮遇溪邊二女詩」(『菅家文草』巻五)

半年長聽三春鳥、帰路独逢七世孫。

(ニ) 大江朝綱「暮春同賦落花乱舞衣、各分一字、応太上皇製」詩(『本朝文粹』巻十)

謬入仙家雖 為半日之客、恐帰旧里纔逢七世之孫。